

## 伝統的な居酒屋の店構え

### ● 老舗ならではの落ち着いた雰囲気

店先に立つと少し緊張するものの古びた暖簾をくぐってガラリと戸を開け、コの字型カウンターに着く。中には店主か女将、店員さんがいて四方からの注文の声にてきぱき応えている。カウンターに10人余りと4人掛けテーブルが3〜4卓。客の年齢層は高く、1〜2人客が中心。心地よいざわめきが店の賑わいをつくる。うらぶれた建物の昭和レトロな店もいいが、小さな傷ひとつにも歴史を感じさせる重みのある店もいい。これぞまさに日本の居酒屋という感じである。

老舗酒場の居心地のよさは店の造りをなくして語れない。魅力は何といっても落ち着くところだ。雰囲気も味も、よい意味でいつも同じ。時間が止まったような空間のなかで味わう酒は格別。はじめて訪れたなら、昔ながらの造りの天井や建具などにも眼を配ろう。

### ● 老舗もビルに入る時代

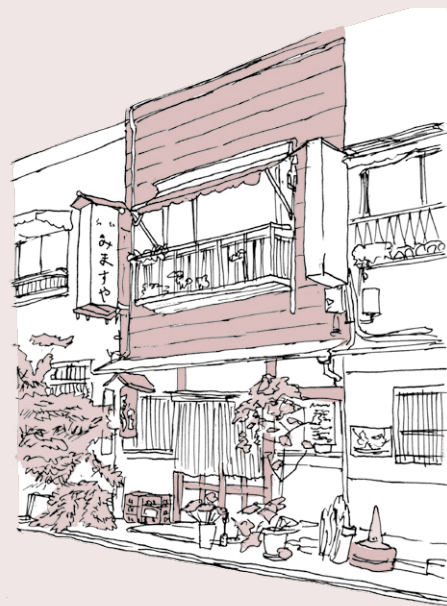
そんな伝統的な居酒屋は都内にまだいくつもある。創業年順に挙げると、安政3年(1856)の根岸〈鍵屋〉、明治38年(1905)の神田淡路町〈みますや〉、昭和29年(1954)の秋葉原〈赤津加〉などはまさに歴史が息づく店。古い建物のままいまでも健在で、その一角だけタイムスリップしたような感覚にも陥る。

ただし老舗のなかでも北千住〈大はし〉(明治10年創業)、森下〈山利喜〉(大正14年創業)のように建物が老朽化し、改装したりビルに入る時代だ。昭和レトロを売りにする新しい店に行くくらいなら、いまのうちに創業当時の老舗を目に焼き付けておくべき。明治も大正も昭和も死んではいない。酒飲みはそれを五感で味わうことができる。

### 歴史を感じさせる店

#### みますや(神田淡路町)

明治38年(1905)創業。建物は緑青の吹いた銅板仕上げの看板建築。赤ちょうちんに縄のれんが下がる店構えは一見の価値あり。テーブル席と小上がりがありランチ営業も



#### 赤津加(秋葉原)

昭和29年(1954)創業。秋葉原のこの一角だけタイムスリップしたような佇まい。店内に入ると、外の喧騒と完全に遮断された居酒屋世界を味わえる



#### 大はし(北千住)

明治10年(1877)創業だが、平成15年に改装されてきれいになった。看板の「千住で2番」というフレーズが有名(「1番はお客様」だとか)